

下呂市採集の縄文時代資料

～下呂市萩原町神屋垣内遺跡・馬瀬地内採集資料より～

長屋幸二

A collection of Jomon period artifacts from Kamiyagaito site
in Hagiwara and some sites in Maze, Gero city

Koji NAGAYA

1. はじめに

私が小学生の頃、友人たちと遊んだ帰り道で一片の素焼きの陶片を拾った。厚さやカーブの具合から瓦であろうとは想像できたが、今のものとは全く違う。きっと昔のものだ! と思い、胸が躍った。ただ、昔のものであるにしても、数十年前のものであるのか何百年も前のものであるのかが分からない。家で親に見せてみたが、分からないという。親が知らないのであれば数十年前ということはないであろう。ますます期待をふくらませ、翌日、学校で先生に見ていただいた。

先生は「江戸時代くらいの瓦ではないか」とおっしゃった。江戸時代という時代は授業で習って知っていても、何か絵空事であるような思いがそれまではあった。しかし、手にした一片の瓦片から、私たちが暮らしているこの場所で江戸時代の人も暮らしていたことが実感でき、当時のくらしの一端を垣間見た気がした。飽かず空想を楽しめた少年時代のことであるから尚更である。

私が拾った瓦片は、実は古代のものであった。今思えば先生の答は不正確なものではあったが、もしあの時「わからない」と答えられていたら、私にとって歴史・考古学は近づきたい不可解な存在のままであったことであろう。

それ以来、考古学は私にとって身近に感じられる学問となった。私たちが生活している郷土に、歴史を物語る材料があることが、実に興味深かった。

私と同じような体験をした人は少なくないであろう。畑仕事の間などに見つけた石鏃などを、出土地点毎に綺麗に箱に収めてあるのを見せていただくことがよくある。出土地点を記録することは学問上とても大切なことである。出土地点の分からない資料は、どんな優品でも研究では使えない。出土地点をきちんと押さえている人は、きっと考古資料の価値を正しく認識している。郷土の歴史を物語るものだということを分かっている。

2006年の11月、下呂市馬瀬の二村利明氏より資料の寄贈を受けた。二村氏は「資料は個人が所蔵して眠らせる

より、公のものとして示す方が生きるのではないか」という考えから寄贈してくださった。考古資料の持つ価値を、より深く理解した考え方であろう。その思いに報いるため、ここに図化して資料を紹介していきたい。

資料は、大きく2群からなる。1つは下呂市萩原町の神屋垣内遺跡の資料。もう1つは下呂市馬瀬地内のいくつかの地点で採集された資料である。

2. 神屋垣内遺跡採集資料について

神屋垣内遺跡について

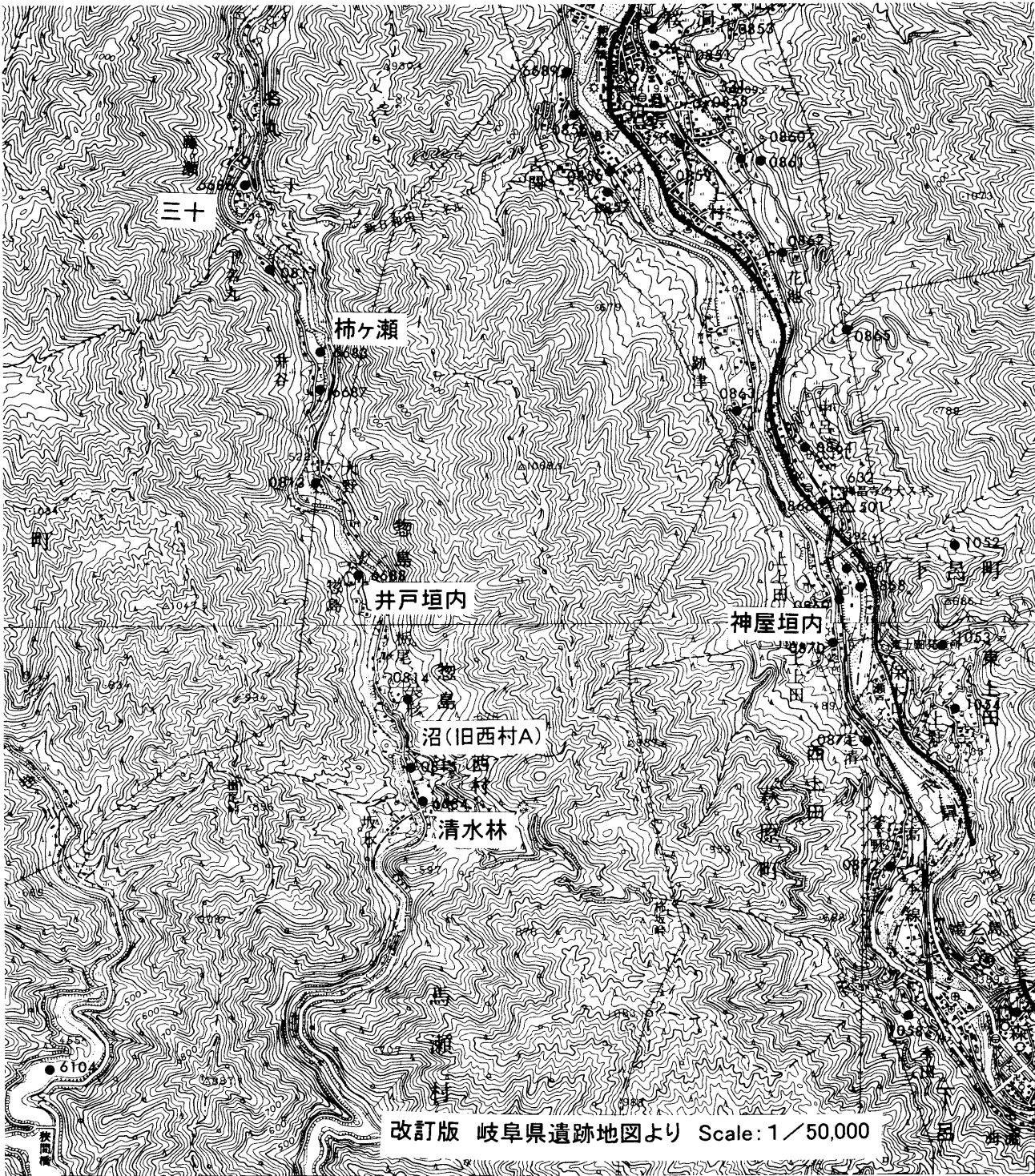
神屋垣内遺跡（かみやがいと 県遺跡番号G22H00870）は下呂市萩原町西上田神屋垣内に所在する。南流する飛騨川右岸に南北1200m、東西300m、標高390mほどの河岸段丘があり、その南半が崖錐堆積物に覆われている。遺跡はこの扇状地の東南部、扇央部やや扇端よりの、見晴らしの良い緩斜面に位置している。標高401mほどである。

同じ段丘の北半には、おきた 沖田遺跡（県遺跡番号G16H00867）、おおきのした 大木ノ下遺跡（県遺跡番号G16H00868）、ひさまつ 久末遺跡（県遺跡番号G16H00869）の3遺跡がある。3遺跡とも西側山塊から流れ出る石浦谷の近くに立地している。

沖田遺跡は昭和48年に萩原町教育委員会によって発掘調査が行われ、中期中葉後半の堅穴住居跡や、早期末・中期中葉前半の土器などが得られている（紅村ほか1974）。また、昭和10年頃には耕地整理の際に中期後葉の土器や石囲い炉らしき遺構が見つかったという。他2遺跡は詳細不明であるが、いずれも遺跡地図には縄文時代の遺跡として登録されている（岐阜県教育委員会1990）。

今回紹介する神屋垣内遺跡の資料は二村氏が採集したものではなく、出土状況は二村氏の聞き取りによる。以下のような状況であったという。

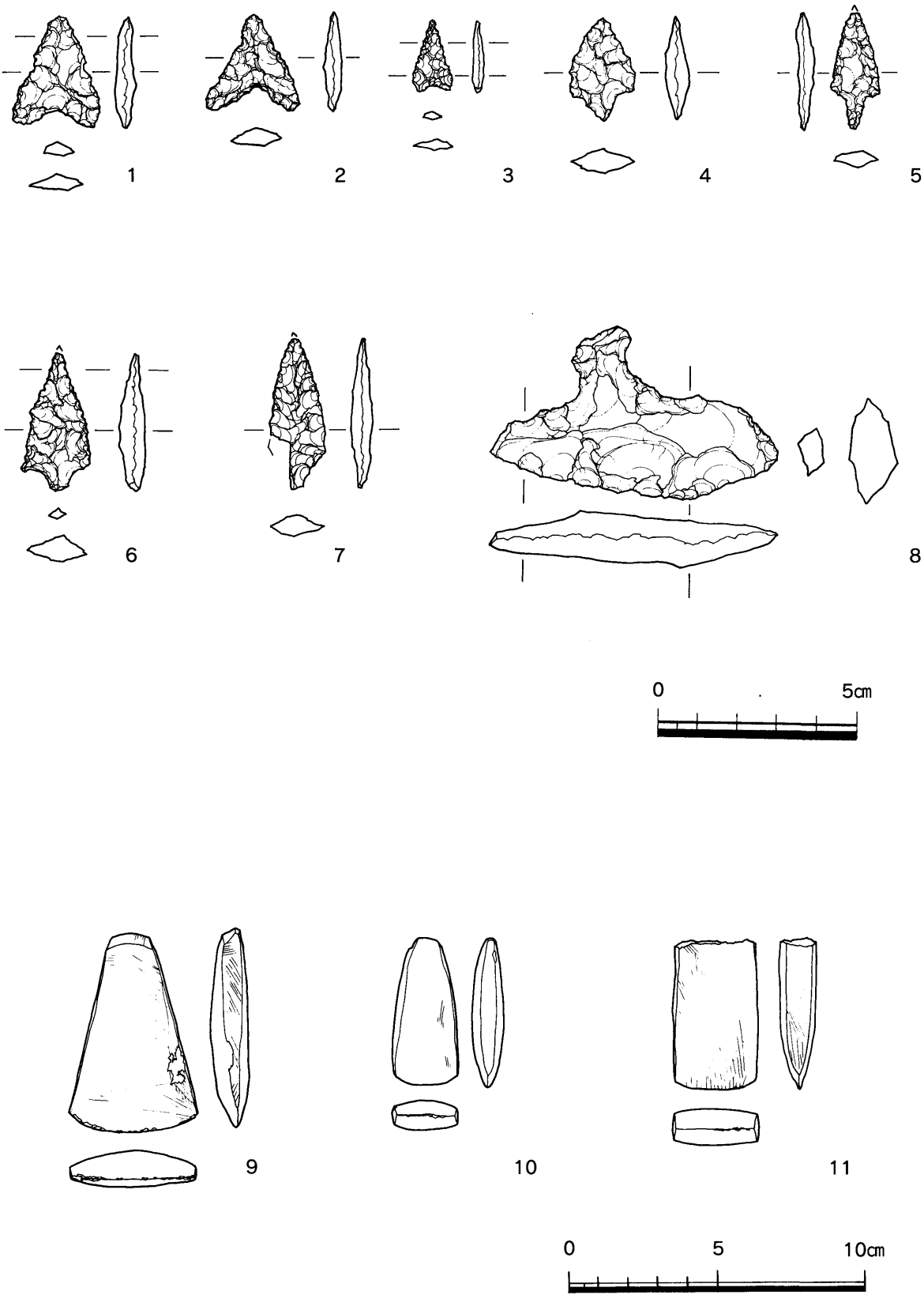
採集年は昭和3～5年頃。高山線敷設のために掘削した土砂中及び近くの畑で採集されたものと聞いている。現在、高山線の際まで県道の高さで埋め立てられているが、もともとは緩やかな傾斜を持った畑地であった。



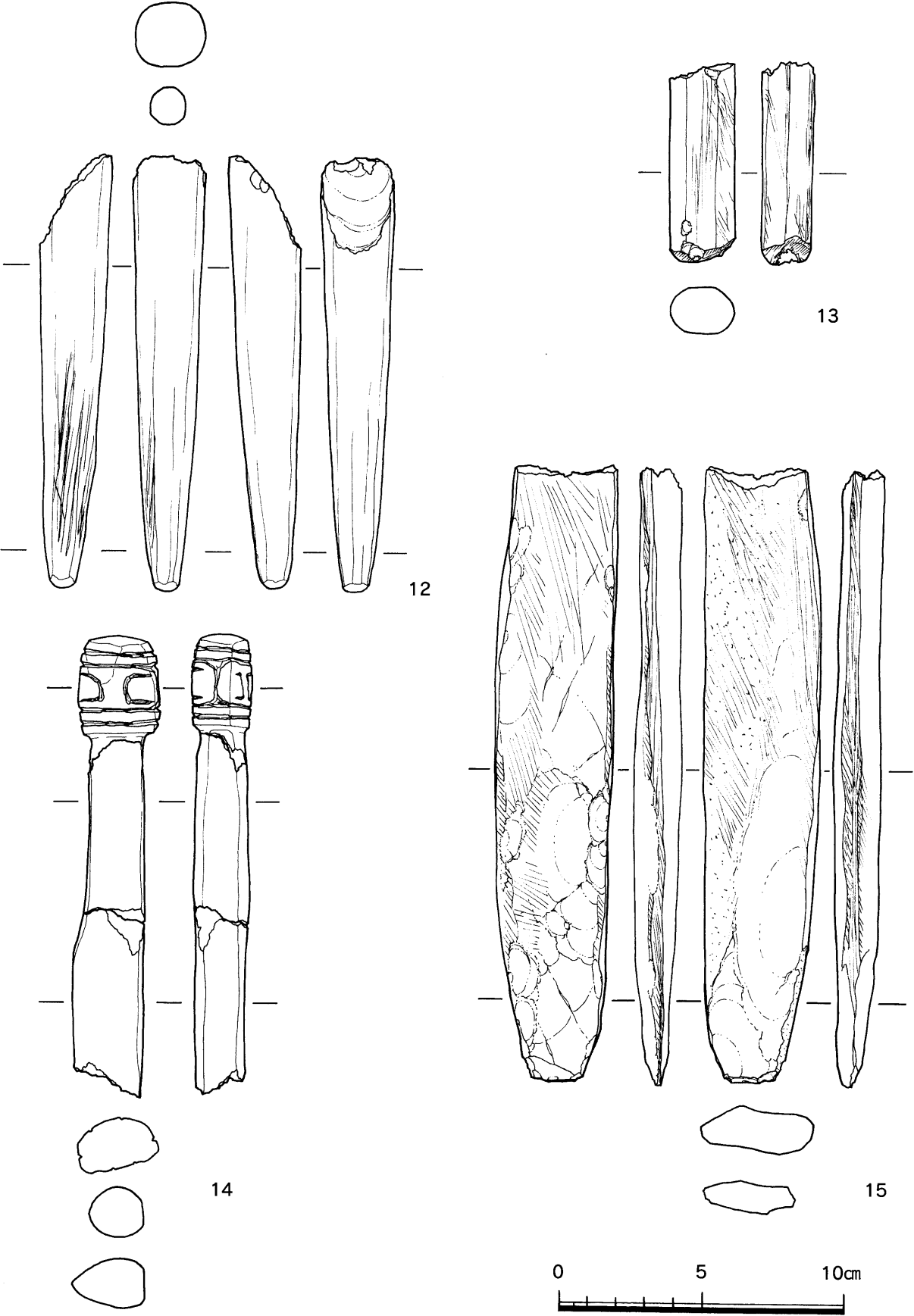
番号*	遺跡名*	所在地*	時代*	採集者による採集地メモ	採集年
815	沼(旧西村A)	馬瀬村西村沼	縄文	馬瀬西村西の下	昭和56
6683	柿ヶ瀬	馬瀬村井谷柿ヶ瀬	弥生	馬瀬井谷	昭和57
6684	清水林	馬瀬村西村清水田	縄文・弥生	馬瀬西村 旭屋前	昭和56
6686	三十	馬瀬村名丸三十	縄文	馬瀬名丸三十(宅地)	昭和57
6688	井戸垣内	馬瀬村惣島井戸垣内	縄文	馬瀬惣島井戸垣内惣島小学校	昭和59
870	神屋垣内	萩原町西上田神屋垣内	縄文		昭和3~5

* 印は改訂版岐阜県遺跡地図(平成2年)による

第1図 遺跡位置図



第2図 神屋垣内遺跡 採集資料



第3図 神屋垣内遺跡 採集資料

採集資料は7点の石鏃、1点の石匙、3点の磨製石斧、4点の石製品の計15点である。土器などは得られていない。全ての資料を図示した。

石鏃

5は素材剥片のポジティブ面を示すために腹面側を図化した。それ以外は背面側を図化した。

1・2は下呂石製の凹基鏃。基部挟りこみの深さに相違はあるが、調整剥離（石器を覆う剥離痕のほとんどは調整剥離のうちでも最終的に施されたものに過ぎない。本論で単に調整剥離・剥離と称しているものは石器に残る最終的な調整剥離を指すこととする）の粗さや手順（先端部→基部の方向に調整剥離が進む傾向がある）、両側縁が内湾気味となる形態は類似している。1は質量1.41g。2は2.33g。3はオリーブ色のチャート岩製凹基鏃。総じて丁寧な深い剥離で薄手に仕上げられるが、左側縁上部の調整剥離は浅く急角度で、この調整は細身にしようとする意図によるものであろう。質量0.32gと小ぶりである。

4～6は下呂石製有茎鏃。4は厚手の剥片を素材としているため調整剥離も厚めで、上半部は薄く仕上げられているが下半部はステップ・ヒンジ気味で薄くしきれていない。両側縁外湾する。質量1.76g。5は0.92g。6は上半部のみ薄く細身に仕上げられている。上半部の調整剥離は下半部の剥離をきっており、先端を欠損したことによる修復の可能性もある。質量2.90g。

7は赤橙色チャート岩製。薄く深い調整剥離が整然と並ぶ。かえしが浅く舌部も幅広の逆三角形をしていることから、形態的には小型有舌尖頭器のようにも見える。しかし、基部端部をしっかりと仕上げない点や質量2.03gというサイズの小ささから、有茎鏃であると判断した。

石匙

8は下呂石製の石匙。右上部の大きな剥離面はポジティブ面である。刃部は図化した面を打面に急角度の調整を裏面側に施し、片刃気味に仕上げている。質量25g。

磨製石斧

9～11は磨製石斧。いずれも定角式で、刃部が外湾する小型の石斧である。

9は濃い茶色に濃い緑が混じる蛇紋岩製で、基部を細くする顕著な撥形である。刃部は片刃で、刃部幅42mm。基部の端部付近に、横位に走る筋状の傷がある。これは他の擦痕と比べて幅広で深く、差異は明確である。角の部分に顕著であることから、装着時についた傷かもしれない。基部端部も斜めに面とりされている。質量50g。10は乳白色の石材を用いているが、表面の風化、汚れのため石材の特定はできない。撥形気味で刃部幅20mm。

質量18g。11は乳白色の蛇紋岩製。基部は折損している。刃部幅26mm。質量37g。

石製品

石棒・石刀類が4点採集されている。1点が未成品、3点は破損品である。

12は泥岩と思われる暗緑色でやや軟質の石材を用いている。叩くと金属音がするので若干ホルンフェルス化しているようである。表面は風化とスレのために擦痕が不明瞭になっているが、一部に傷状の深い擦痕が見られる。端部に近い細い部分は縦位に走る稜の痕跡が8本認められる。8つの面を単位に成形し、その後まるく整えたように見える。太い部分は稜が不明瞭で、よりまるい断面となる。端部は敲打による調整によって丸くおさめられている。質量118g。

13はオリーブ色がかった灰色の泥岩を用いている。断面はやや扁平な楕円形で、擦痕が良く残る。擦痕は細くて縦に走るものが全面を覆い、深くて斜めに走るものが1つの扁平面を中心に見られる。深い擦痕は残存部の端まで及ばず、折れた後に施されたようである。一方の端部は折れた後、研磨によりまるく整えようとしているが、中途半端で折れ面が中央部に残る。質量55gである。

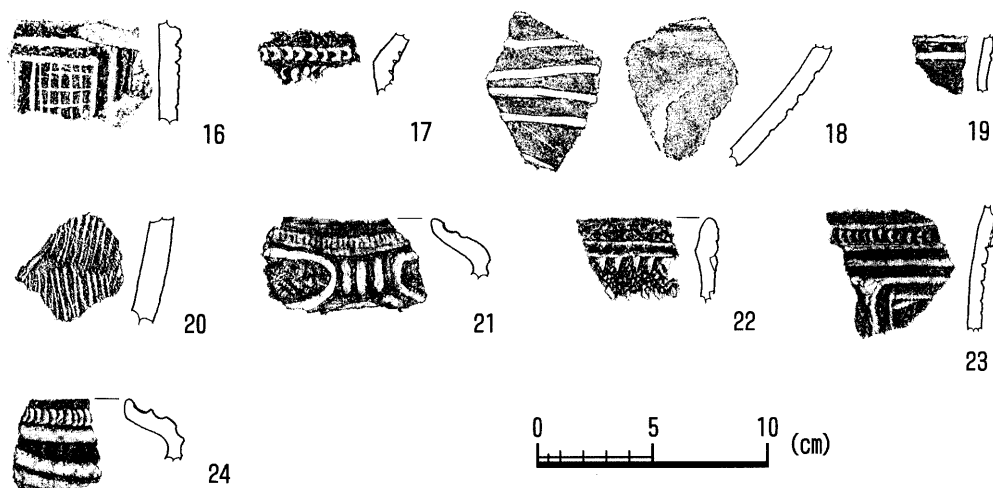
14はオリーブ色の結晶片岩を用いたいわゆる石刀である。柄頭部には断面V字状をなす陰刻が施される。身は直刀状で分厚く、背は広い面をなす。柄部は7cmほどで、緩やかな刃関を経て刃部に移行する。刃部と柄頭部は20°ほど傾きにズレがみられる。質量は136gである。

15は節理が発達する暗褐色の泥岩を用いている。石刀もしくは石剣の未成品であろうか。左図に主要剥離面が残り、横長の剥片を素材としたことが分かる。薄く深い剥離により打瘤付近を整形した後研磨を施している。擦痕の方向は不揃いで疎密があるが、打瘤部と両側縁の研磨は顕著である。特に、両側縁は研磨によって面を形成するほどである。幅をまず定めようとしたのであろうか。質量は198g。

神屋垣内遺跡の資料について

土器が見られないため時期の特定は難しいが、縄文中期から晩期にかけての資料が混在しているようである。石匙や凹基鏃のいくらかは中期に位置づけられよう。一方で、14のような石刀の優品や有茎石鏃など、縄文晩期を中心とする遺物群の存在が目を引く。

沖田遺跡は中期前葉と中期後葉を中心に営まれた遺跡であるが、晩期の資料は報告されていない。中期には段丘上の全面で活動が行われ、晩期には段丘南部の扇状地上の小高い場所で石棒類を用いた活動があったことが示された。



第4図 馬瀬地内採集資料

3. 馬瀬地内採集資料について

ここに報告する資料は二村氏採集の資料であり、いずれも縄文土器である。採集した年、採集地・出土状況に関するメモは第1図下の表に示した。他に、二村氏が譲り受けた石製土掘り具や磨製石斧、敲き石・磨石なども寄贈を受けたが、それらは採集地が不明であるため報告しない。

馬瀬地区の遺跡は、馬瀬川が形成する段丘面上と、それを覆う扇状地上に多く存在する。今回紹介する最も北の三十遺跡から最も南の清水林遺跡まで、直線距離で5.3kmほど。標高は三十遺跡が524m、清水林遺跡が468m、他の遺跡は全てこの間におさまる。

馬瀬川上流の遺跡から順に示していきたい。なお、ここにあげる遺跡名は改訂版岐阜県遺跡地図（岐阜県教育委員会 1990）による。採集地点と遺跡地図との照合は二村氏に確認しながら行った。また、遺跡の詳細について『馬瀬村の埋蔵文化財』（馬瀬村教育委員会1985）に記載されているので参照した。

16は三十遺跡採集資料。「上段、家屋建設工事中に採集」とメモに付記されている。当遺跡が所在する名丸地区には段丘面が2面あり、上位段丘面で採集したということであろう。中期前半、北陸の新保・新崎系に属する。

17・18は柿ヶ瀬遺跡採集。遺跡地図では弥生時代の遺跡となっているが、寄贈資料には弥生時代の遺物は含まれない。『馬瀬村の埋蔵文化財』には井谷遺跡として紹介され、炉跡があったとされる。17は胴部から頸部にかけて「く」の字に屈曲する部分であろう。半裁竹管による連続刺突が屈曲部をはさんで上下に並ぶが、下列は「C」の字状に刺突が施され、上列は逆「C」の字に施される。時期は16に準ずるか。18は鉢・浅鉢状の器形で、横走る6条の沈線が認められる。後期あたりか。内面

に、横走る沈線が一条みられる。

19は井戸垣内遺跡採集。薄手で、平行に横走る2条の沈線が見られる。後期に属する。

20・21は沼遺跡採集。20は厚手で、表面に燃糸文が縦位に施される。21は中期後半、東海系の咲畑式土器。

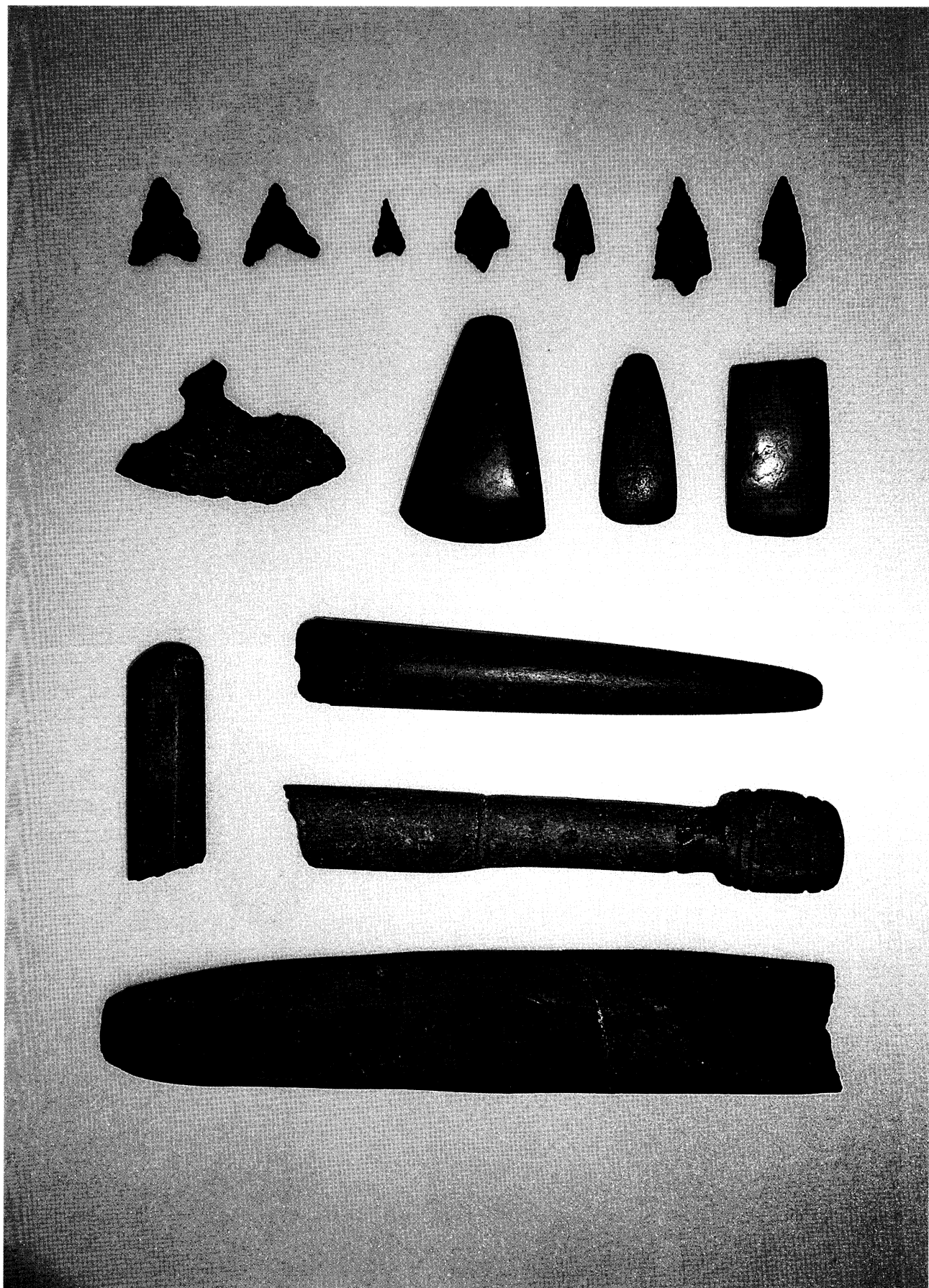
22～24は清水林遺跡。『馬瀬村の埋蔵文化財』では柿本遺跡とされ、（旧）馬瀬村最大の遺跡として紹介されている。前期から晩期、弥生時代の土器が見られ、石器も前期のけつ状耳飾り片や石匙から晩期の石棒・石刀まで多種の石器類が掲載されている。22・23は新保・新崎系、24は咲畑式土器。

今回紹介した資料は、大まかに見て中期前半の北陸系土器、中期後半の東海系土器が主であったが、これが馬瀬川上流域の傾向を示すとはいいがたい。清水林遺跡で中期後半の信州系土器が埋甕のような状況で見つкаっているとの情報もある（馬瀬村教育委員会前掲）。

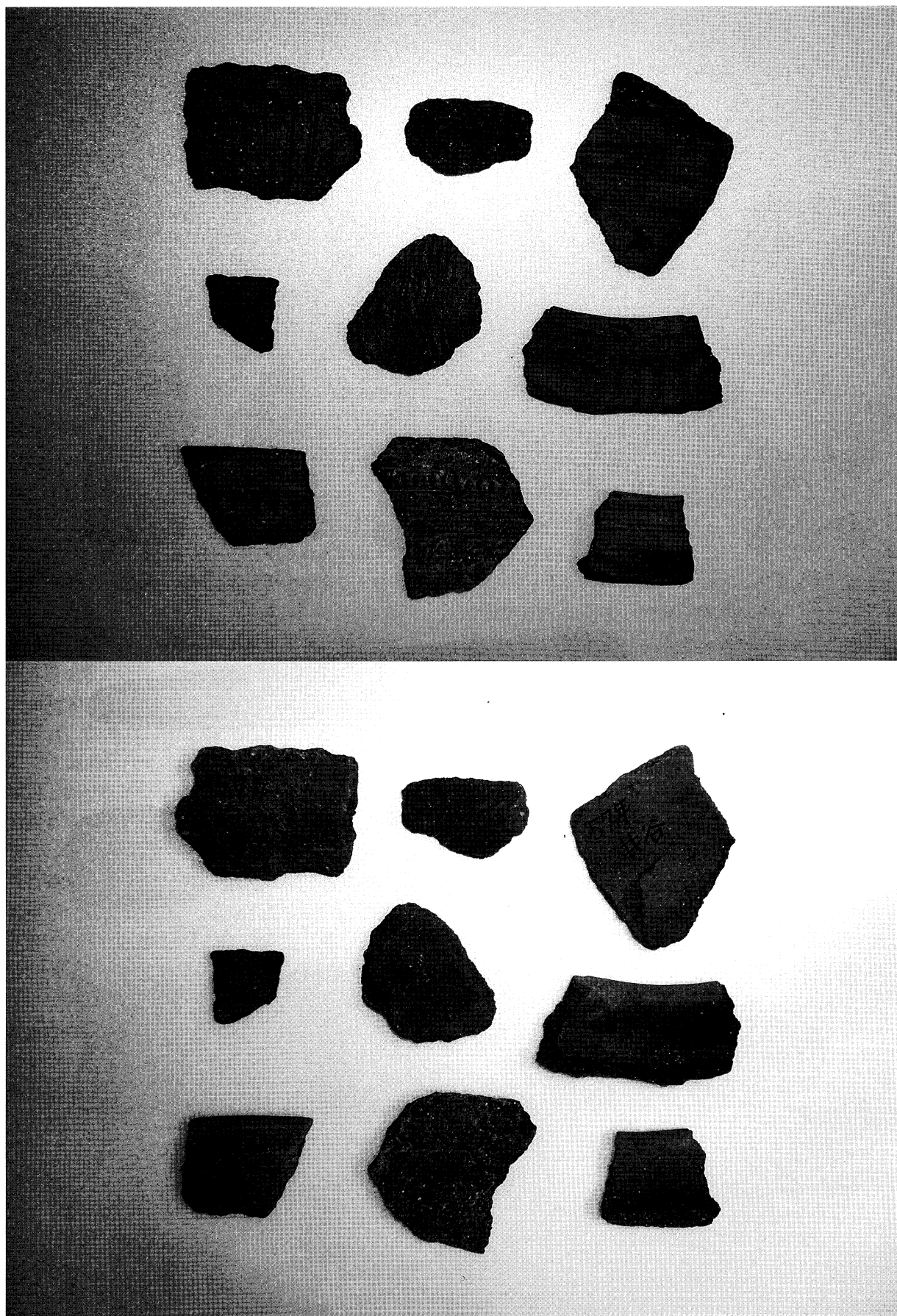
飛騨川流域と長良川流域との交流について、中期後半には明宝・白鳥方面と八幡方面で下呂石利用に差があることが指摘されている（長屋 2006）。その詳細を明らかにするためには旧金山町内と旧馬瀬村の資料比較が必要で、研究上重要な地域であることを申し添えたい。

参考文献

- 紅村弘・増子康真・倉地正春1974『飛騨 桜洞・沖田』萩原町教育委員会
- 長屋幸二2006「岐阜県奥美濃地域の遺跡紹介～森本遺跡に搬入された下呂石塊～」『美濃の考古学』9
- 岐阜県教育委員会1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』
- 金山町教育委員会1985『祖師野遺跡発掘調査報告書』
- 馬瀬村教育委員会1985『馬瀬村の埋蔵文化財』



第5図 神屋垣内遺跡



第6図 馬瀬地内